

## 一通の葉書

森 哲 夫

私は大平さんと中学時代に同級生であつたことを光榮に思っている。そして大平さんのまだ少年として将来の華を開く萌芽の姿を見ることができた。私がその時代に感受した大平さんの萌芽の姿が持つ趣は、その後複雑さを加えたにせよ依然として生涯を貫いたように思える。

昭和二年、旧制高校に入つて夏休みの帰省をした私に、中学五年生の大平さんは一通の葉書を送つてきた。その字は几帳面で、また後年の大平さんの筆蹟に見られるような優雅さがほの見えていた。当時の中学生にしては珍しく句読点を正確につけてあつた。その内容は進学上の悩みを打ち明けるものであつた。経済的な事情、家庭的な事情などで進学すべき学校の選定に苦しんでいるというものであつた。このようにして中学時代から苦勞の多い人であつた。そして困難にじつと堪えて初志を貫く徳を徐々に身につけて行つたのであろう。

昭和十四年、大蔵省派遣の興亜院事務官として蒙疆の張家口に勤務する大平さんを、その旅宿に訪ねて一夜語つたことがあつた。私は中国、満州国訪問の旅の途上であつた。張家口はリンゴやブドウにしても実が小さくて、砂漠がかつた不毛の地のように思えた。民家は泥土を固めた四角いものが多い。雨がほとんど降らないのでこれで保つのだそつた。その旅宿は日本の民間人が営むもので、簡素な、灯なども暗い建物であつた。私はその時の情景を想起すると、ここでも大平さんは索莫たる生活に堪えながら経済の分からない軍人と論争しなければならぬ試練の時代であつたように思える。人並以上の苦難にじつと堪えていた大平さんの姿が目に見えるのである。

さて、池田内閣の官房長官となつた頃、大平さんは私に語つたことがある。「黒金泰美君と、今後少なくなるとも二年間は死んだ気になつて池田さんのために尽そうと約束した」と。こういう覚悟は現代では余り見られない。農村出身者、宗教者、また大きい苦勞に堪えてきた人間としての大平さんの真骨頂を示すものであつて、誠に貴いものである。私は、大平さんが「死んだ気になつて働く」精神をその後も頻繁に發揮されて、そして遂に冥界に突入されたのだと思つている。今にして思えば歴代総理のなかには「自分は人を食つていたお蔭で長生きしている」と冗談をいつた方がおられるが、大平さんも少しは「人を食つて」くれたらよかつたと悔まれる。

中学同級生として私が畏敬措くあたわざる大平さんのもう一つの美德は、その謙虚さ、素朴さである。社会的地位が上昇して大臣になつても総理になつても、私と会つたときは中学時代そのままの顔になつている。大平さんの素朴さ、謙虚さがその表情に溢れているので、そう見えるのである。総理に就任して間もない頃、私はお祝いの辞を呈するため総理官邸を訪ねた。総理室に入るとすぐ左側にある総理の机の前に大平総理は腰かけていた。机の前に立つて私が「おめでとう」というと、大平さんは破顔一笑「とうとう、こんなところに坐ることになつたが」と、中学時代の用語そのままにしゃべり、若干のはにかみを見せた。「なつたが」との「が」とは私達の郷里の方言とでもいつてよい。それは詠嘆の意味を持つ。客観情勢がどんどん進んである結果が生まれ、自分としては何とも仕様がないう感じを表わす。こんなわけで大平さんの言葉は謙虚で素朴なものである。

その後も、私が政府のエネルギー政策について痛烈な批判を総理室で大平さんと秘書官を前にして口にしたことがあつたが、大平さんはゆったりとした顔でそれをじつと聞いてくれた。この寛大さは私を中学同級生として見てくれたからであろう。今や巨星地に墮ちて空し。しかし天の一角からは、大平さんの偉大な美德が光となつて私達に降り注いでいる。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(石油資源開発社長)